

第31回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会報告

第31回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は「国際理解教育の課題」というテーマで2011年7月2日（土）午後1時30分から511講義室で開催され、48名の参加者があった。

◆開催日時 2011年7月2日（土） 13時30分～16時30分

◆受付時間 13時～

◆開催場所 研究会 甲南大学 5号館1階511講義室
懇親会 甲南大学 5号館1階カフェパンセ

◆次 第

13：30～ 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 中村 典子

<第1部>

13：40～ 基調講演 「国際理解教育で求められること」

元・岐阜大学教育学部教授現・国際教育総合文化研究所所長 寺島 隆吉

14：40～ 質疑応答

14：50～ 休 憩

<第2部> 本学の国際理解教育の紹介

15：05～ 「平和教育と日本の心」

国際言語文化センター 教授 中村 耕二

15：20～ 「自国理解と国際理解」

国際言語文化センター 教授 胡 金定

15：35～ 「パースペクティブの転換と自明性の揺らぎ」

国際言語文化センター 准教授 柳原 初樹

15：50～ パネルディスカッション

総合司会 国際言語文化センター 教授 藤原三枝子

16：00～ 質問シート回収

16：10～ 質疑応答

16：25～ まとめ・閉会の辞 国際言語文化センター 教授 金 泰虎

16：30～ 懇親会

講師プロフィール

● 寺島隆吉 (テラシマ タカヨシ)

1944年生まれ。東京大学教養学部教養学科(科学史科学哲学)卒業。元岐阜大学教育学部(英語教育講座)教授。現在は国際教育総合文化研究所・所長、英語教育応用記号論研究会(JAASET、略称「記号研」)代表。石川県立高校教諭(英語)として在職中に、金沢大学教育学部大学院教育学研究科(英語教育)修了。コロンビア大学、カリフォルニア大学バークリー校、サザン・カリフォルニア大学客員研究員。ノースカロライナ州立農工大学(グリーンズボロ)、カリフォルニア州立大学ハイワード校日本語講師。

著書:『国際理解の歩き方:映像と音楽で学ぶ平和・人権・環境』(あすなろ社/三友社出版)、『英語教育が亡びるとき』『英語教育原論』(以上、明石書店)、『学習集団形成のすじみち』(明治図書出版)、『センとマルとセンで英語が好き!に変わる本』(中経出版)、シリーズ『授業の工夫』全6巻、『英語にとって学力とは何か』『英語にとって授業とは何か』(以上、三友社出版)、『英語にとって文法とは何か』『英語にとって音声とは何か』『英語にとって教師とは何か』『英語にとって評価とは何か』、シリーズ『英語音声への挑戦』全6巻(以上、あすなろ社)など多数。

訳書:『チョムスキーの教育論』『チョムスキー、21世紀の帝国アメリカを語る』『アフガニスタン、悲しみの肖像画』(以上、明石書店)、『衝突を超えて—9・11後の世界秩序』(日本経済評論社)など。

* * * * *

2011年7月2日(土)13:30より甲南大学5号館511講義室において第31回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会が開催された。今回の全体テーマは、「国際理解教育の課題」で、元岐阜大学教育学部教授、現国際教育総合文化研究所所長の寺島隆吉先生をお迎えし「国際理解教育の課題」についてご講演いただいた。その後中村耕二教授、胡金定教授、柳原初樹准教授による本学の国際理解教育の紹介があり、最後のパネルディスカッションでは、白熱した議論が繰り広げられた。

最初に国際言語文化センター所長中村典子教授が開会の辞と基調講演者の寺島隆吉先生の紹介を述べた後、寺島先生が壇上に立たれた。

本題に入る前に先生は国際理解教育に携わるようになった背景をユーモアを交えて述べられた。チョムスキーに出会ったのは、教養部解体後に移った岐阜大学教育学部生涯教育講座で「国際理解コース」を担当してからで、先生の人生は、ビートルズの歌“Long and Winding Road”そのものであったそうである。その後さらに英語教育講座に移り、学部レベルでは「英語科教育法」と「異文化理解」を担当された。

寺島先生は、「異文化理解」の授業では、まず学生にはユネスコの「国際教育・勧告」を紹介している。英語教員になるためには「異文化理解」が必修科目であるが、これまで

の「異文化理解」は、アメリカ・イギリス文化理解を教えるのが普通だった。しかし単に欧米文化理解が異文化理解ではおかしいと考え、学生には授業開きで「私の授業は異文化理解ではなく国際理解を教える」と宣言されてから。授業計画を配布されるようだ。

学生には先ず平和学の創始者ヨハン・ガルトウンクの「暴力の類型」を紹介する。暴力には「直接的暴力」と「間接的暴力」の二つがある。たとえばアメリカはブッシュ氏によるイラク侵攻に見られるように、世界中に暴力をふるってきたが、オバマ政権になっても無人爆撃による一般市民の殺害など、ブッシュ政権よりもひどくなっている。これは「直接的暴力」の例である。

他方、「間接的暴力」をガルトウンクは「構造的暴力」と名づけている。たとえば、貧富の格差を広げ、貧者・弱者に高等教育を受ける機会を奪うといったことを指して、「構造的暴力」と言う。キリスト教は優れた宗教だが、イスラム教はテロリストの宗教という偏見や攻撃は「文化的暴力」だとガルトウンクは言っている。

学生には、このような「構造的暴力」の問題を先ず考えさせる。Global Thinking, Local Action ができるような学生を育てるのが大切である。以上のことを踏まえた、寺島先生の考える国際理解教育には以下の3つの柱がある。

(1) アラブ・イスラム理解

ムスリムの教えの3つからなる。イスラム教は摩訶不思議な宗教ではなく、キリスト教がユダヤ教を改革したものであると同じように（だからキリスト教徒にとっては、旧約聖書[ユダヤ教の聖典]と新約聖書の二つが聖典となる）、イスラム教は、キリスト教のかかえる矛盾を合理化したものとも言える。イスラム教の経典が、旧約聖書、新約聖書、コーランの三つになるのは以上の理由による。だから。まずはアラブ・イスラムを理解することが重要。

(2) 欧米理解

たとえばアメリカは「豊かな国」「理想の国」「民主主義のモデル国」だと思われているが、アメリカ国内にかかえる巨大な貧困層、国外でおこなわれている拉致・拷問など、アメリカの負の側面も教えるべきである。

(3) アジア理解

ドイツが第二次世界大戦後、ドイツは謝罪なしに近隣諸国との経済交流は不可能だった。とくに中国・韓国との歴史を教えるべき。したがってドイツは戦後すぐ近隣諸国に謝罪して、中学生になると1年間、自分たちがおこなった加害者としての犯罪行為を徹底的に学ぶカリキュラムをつくった。それに比して日本の教育課程は「被爆国」としての意識ばかりが強く、加害者としての歴史教育は、正課からはずされてきた。これはアジアと貿易をしなくても、アメリカだけとつき合っていれば経済復興できたからである。それどころか朝鮮戦争やベトナム戦争の特需で大儲けしたから、なおさらアジアに謝罪する機会を失った。日本が中国・韓国に第2次大戦で何をしてきたか。たとえば満州で731部隊は何をしたか、きっちり教えるべきである。

また現代の英語偏重に抗するため、「英語教師の、三つの仕事」として、次の三つを教え考えさせることを重要視してきた、と具体例をあげて説明された。

(1) 英語だけが外国語か。

なぜ隣国である朝鮮・中国・ロシアの言語を学ばないのか、それは本当に役立つ言語なのか、といった問いかけが大切。

(2) 英語が役立つとはどういうことか。

英語教師自身が、英語を自分の生活で役立てていない。教室で教える以外に、日常的に英語を使って何かをして役立てているわけではないのに「英語を学べば役立つ」などと言っている。

(3) 英語の「知識」ではなく「学び方」を教える。

英語の「水源地」を教え、自力で走り出すから、つまり「転移する学力」を育てなければならない。日常的に使わない会話のフレーズを覚えさせても、使わないものはすぐ忘れる。これを「ざる水」効果と呼ぶ。

先生は次に「英語教師の、三つの危険」として次の三つを掲げられた。

(1) 教師の自己家畜化 (いわゆる「英語バカ」)

(2) 学校の自己家畜化 (たとえば、小学校の英語教育)、

(3) 国家の自己家畜化 (アメリカの「プードル犬」)。

先生は最後に、国際理解教育の課題として「ことばの教師として何ができるか」「メディア・コントロールにどう立ち向かうのか」「メディア・リテラシーの力をどう育てるか」について述べられた。事例研究として、福島原発事故の際、大手メディアが何をどう報じたか、原発が日本に導入された背景として、読売新聞社主正力松太郎と日本テレビがどのような役割を果たしたかなどを取りあげられた。

現代社会はジョージ・オーウェルの小説『1984』のようで、NHKでさえ Double Think を勧めているかのようなのである。だから「疑問をもち、立ち止まって考える」ことを指導することが何よりも大切であると述べられた。学生には問題意識を持たせるために常に最低一つの疑問を持つように指導されているそうである。寺島先生は熱弁をふるわれ、会場からも質問が相次いだ。ご講演が終了したのは15時7分であった。

休憩を挟んで中村耕二教授が本学の「国際理解 I」について概要を述べられた。国際理解 I の目的は学生に、世界の諸地域の人々との相互依存によって私達の社会が成り立っていることや文化の多元性を認識させること、異なる文化の人々とのコミュニケーション能力を育てること、人権を尊重し、歴史から学び連帯感と和解に繋げることである。講義はグローバルな問題に関して学生が主体的に自分の意見や解釈を発表したり、卒業生や NGO/NPO からのゲストスピーカーによる講演があったり、本学への留学生と交流したり、バラエティに富んでる。

続いて胡金定教授が「国際理解 II」について紹介された。国際的な相互依存関係の強ま

る中、連帯と協調は不可欠であり、この講義では連帯と協調の精神の育成をはかり、学生に広い視野を持たせること、日本人としてまたは個人としての自己の確立を図ること、相手の立場を尊重しつつ自分の意見を発信できるようにすることを目的としている。また外国語による基礎的な表現力やコミュニケーション能力の育成を図ることも目的の一つであるので外国語教育の一環として位置づけている。前期は胡先生が担当し、毎回ゲストスピーカーを迎え70分の講演をしていただきそのあと学生は感想文を書くことになっている。前期は日本を含むアジアの政治、経済、文化、芸能、宗教など様々な分野で活躍する方々をお迎えする。今年の前期はマスコミ関係の方が多かったそうである。

最後に「国際理解 II」の後期を担当されている柳原初樹准教授が2010年の講義について説明された。後期は主に欧米の問題を扱っている。2010年度は沖縄普天間基地問題や、神戸市の国際交流、グローバル化の現状、アメリカの動向、裁判員制度・死刑制度の国際比較、十字軍、ドイツワインなど様々なトピックを扱った。講義の目的は学生の視座を転換させ、自明とと思っているものに揺らぎを与えることである。学生にはゲストスピーカーへの質問を促し、ゲストスピーカーからフィードバックを得る。柳原先生ご自身もゲストスピーカーと連携を図って講義を活性化している。

続いてのパネルディスカッションでは司会の藤原三枝子教授から「学生が自立性を身につける、知識から行動力に結びつけるにはどうすればよいか。」という共通の質問があった。壇上には寺島先生、中村先生、胡先生、柳原先生が上がり、質問に答えていった。柳原先生はまず興味を持ち、疑問を持つことが大切、胡先生は学生に元気になってもらう、自信を持たせるべきだと述べられた。中村先生はリサーチペーパーを書かせ、定義をして現状分析、解決策を考えさせ critical thinking ができるようにすることが重要と述べられた。

寺島先生は、「1年生の後期から異文化理解購読が始まるので、ご著書の『国際理解の歩き方』を読ませて、どこかを引用させてA4一枚にまとめ、最後に必ず疑問を一つ作らせる訓練をしている」「映像を見せ、各自がレポートを書かせ、最後に必ず一つは疑問をつけさせる」「また自分たちでつくり出した疑問をグループで討論させ、問題をひとつにしぼって調べた結果をクラスで発表させる」などの事例を述べられた。

フロアからの質問は、英語帝国主義をどう思うか、日本の小学校英語教育についてどう思うかなどの質問が出て、寺島先生は「英語に莫大なエネルギーを注ぐと何かが削られる」「その失われたものを学校教育でどうやって補うのか」「私の言う『母語学力上限の法則』があり、母語学力が低ければ英語の到達レベルも当然低くなる」「小学校から英語を教えなくても日本の経済は世界一になった」「いま日本経済が低迷しているのは英語力のせいではない」と述べられた。

最後に金泰虎教授が学力の転移など本日のまとめを述べ、閉会の辞を述べられた。その後席をカフェパンセに移し、懇親会が和やかに行なわれた。本学や他大学からも教員や学

生が参加し、国際理解教育について様々な事例が紹介され、多様な意見が交換され、有意義な全体研究会であった。

(文責：伊庭 緑)